

ドイツのチキンライス

序文

本詩集に収めたる五十編の詩は、二〇〇九年の一年間で書いたものである。

早い話が、一年もかかってこんな詩集をこさえていたのである。そう思ってみると、実にいやな気分になる。

そのうち何篇かの詩は、ロック音楽の歌詞として書き殴られた。

さて、題名を「ドイツのチキンライス」としたが、私自身はドイツに行ったこともなければ、さしてチキンライスが好物なわけでもない。

ところでドイツには、素晴らしいロックバンドが数多く存在している。ファウスト、グル・グ
ル、アモン・デュール、ポボル・ブフ、クラーン、他にも色々。ちなみに日本にいても彼らのレ
コードを買えるし、来日公演を見る事が出来る。よって、わざわざドイツに行く必要もない。そ
んなわけで私は未だにドイツに行ったこともない。

複葉機

レンガ塀

ヴォーカンソンの家鴨

オレンジジュース・ニュータウン

See More Glass

マカロニ・ホウレン街

カントリー・ロード

いぢき

ジグザグ漫遊記

酸欠の鯉

思い出は無い

おはよう、シラケさん

ですぺら

夢見るカンガルー

何事も無かったようにスパ

常夏のクロス・カントリー

シャボン玉

ドイツのチキンライス

太陽にさらわれて

わたしの中を

青虫の悲劇

凧の歌

織句

みみづ

父をさがして

子どもたちの結婚式

鯛のおかしら

タイノエ

きみは蜜柑を食べながら

チーズトースト狂の夢

浅茅露

散歩

そこに在る

まぶたのある魚

水

電気

アトリエ

夏

思えば間拔けな足

頑是ないよおれは

轟き

恨んだところで仕方無い

決意

まやかしの鼓

ねむれ化石

ホーキ星

それは嘘だった

絶句

時を忘れた象

詩集『ドイツのチキンライス』の最後を飾る詩

複葉機

旧式の飛行機に乗って空を歩けば

覚えた事はひとつのこらず

忘れてしまえる気がして

二枚重ねの羽の間で夢ごこち

旧式の飛行機に乗って

きみのもとまでひとつとび

Aeroplane!

Aeroplane!

きみのもとまで

ひとつとびー

旧式の飛行機に乗って街を見渡せば

忘れた事もすこしは

見つけ出せるかもしれない

旧式の飛行機に乗って

きみのもとまでひとつとび

二枚重ねの羽の間に

きみに乗せてあげたくて

レンガ塀

かぞえ切れない人々

コーヒーカップを手にして

重たげな足どりでレンガ塀の上を歩く

やまぶきいろの砂ぼこり

乗り捨てられたモーター・サイクル

乗り捨てたのはジェイムズ・ジョイス

いまは酒場で呑んでる

時計の針にぶら下がって

死んだふりして見下ろせば

かぞえ切れない人々

かぞえ切れない足どり

信号機がねじ曲がり

マンホールの蓋が消えて

退屈げなジェイムズ・ジョイス

いまだ酒場で呑んでる

タマゴを生み捨てて

飛び去ってゆくカッコーを

思いながらぼくは萎びたハンバーガーを食べてた

コマオトシのフィルムの中

おどり続けるジェイムズ・ジョイス

コーヒー・カップを手にして

みんなどこまで行くのか

コマオトシのフィルムの中

ねむり続けるジェイムズ・ジョイス

かぞえ切れない人々

かぞえ切れない足どり

レンガ塀！

レンガ塀！

ふるぼけた靴を履き

あのこはいつも筆箱に

色とりどりのキャラメル詰めて

レンガ塀！

レンガ塀！

やぶれたコートに犬を隠して

明日の見えない旅路が

地平線まで続いてく

ヴォーカンソンの家鴨

紫の香がたちのぼり

ぼくらをゆつくりとかしてゆく

紫の光にとけこんで

ぼくらはおなじになる

昨日 水辺では

金属の声をした

防水加工でゼンマイしかけの

旅回りのアヒルがいたらしい

約束をやぶるため

一千年もかけて

風をおこしつづける

花を咲かせ続ける

オレンジジュース・ニュータウン

高速道路を吹く風は

オレンジジュースの色してた

フロントガラスに反射して

オレンジジュースで染め上げた

窓の外に広がる町並み

家並

人の波

顔をもたない子どもたちが

学校から帰る時間

ちやうど僕もそんな風に

見慣れた景色にいだかれて

オレンジジュースを飲みながら

靴をはきつぶすまで走っていた

そして僕はこんな風に

見知らぬ景色にとけこんで

オレンジジュース色のまま

はきつぶした靴をひきずっている

高速道路を走る僕

オレンジジュースの色のまま

何もかも滅茶苦茶にして

もう一度やり直したい

そんなことを思う夕暮れは

なぜだか疲れているからさ

さつきから帰る場所すら

ちっとも思いだせないもの

アクセル踏みしめて通り過ぎる

アクセル踏みしめて通り過ぎる

オレンジジュース・ニュータウンが見える場所
僕の知らない街を走り抜ける

See More Glass

かじりかけのライ麦パン

ライ麦畑でつかまえて

ホールデン・コールフィールド、きみはいまいずこ

コネティカットをひよこひよこ歩く

笑い男によるしくな

なんといっても今日はほら

バナナフィッシュにうってつけ

九つの物語

拾い集めて数珠つなぎ

Hapworth 16, 1924 (1965)

時は止まったまま

マカロニ・ホウレン街

地中海沿いを歩くみたいな足取りで

落書きだらけの Yellow Brick Road を歩く

子どもたちはオハジキ遊び

ご婦人がたはフライパンの上で

マカロニいためてケチャップを絡めている

遠慮しないで

いつものやり方で

いつもみたいにとっとと済ませよう

遠慮しないで

いつものやり方で

お前の知ってる一番へんてこな奴を

ところでペンキの缶を傍らに置いたまま

おれは途方にくれて坐っている

頭の上に乗せた赤いレンガ

どうやらひつついちまったみたいで

遠慮しないで

いつものやり方で

いつもみたいにとっとと済ませよう

遠慮しないで

いつものやり方で

お前の知ってる一番へんてこな奴を

カントリー・ロード

たわいもないこと

足あとを消すだけ

向う十年、忘れ去られて

百年後に思い出させる

たわいもないこと

名前を呼ぶだけ

ここから始めるだけ

だから手をにぎってほしい

体温の下がらぬよう

手をにぎっていてほしい

体温の下がらぬよう

まるごと分かち合ってほしい

だれも知らない

だれも気づかない

ぼくらがやることは

これからやることは

だれにも知られない

だれにも気づかれない

オー、何もなくていいよ

百年後に思い出せば

いぶき

スイカをくりぬいて

太陽を集めて

だれもない喫茶店

石を彫り続ける

星くずは自分たちが星だと

いばりくさるけれど

くずはくず

それだけのものさ

ぼくが終わる時

きみが気づく時

うす暗い台所に行き

ネズミ捕りの中で落ち合う

星くずは自分たちが星だと

いばりくさるけれど

くずはくず

それだけのものさ

星くずは自分たちが星だと

いばりくさるけれど

くずはくず

それだけのことさ

ただそれだけのもの

ジグザグ漫遊記

遠ざかるラクダの群

万歩計は壊れた

地球の自転と連動して

ダイエット・コークが噴出する

十七年前、消息を絶ったカメラマン

彼の残像が、焼けつく空気の膜の上を

ジグザグの軌跡を描いて滑ってゆく

空飛ぶコークはどこだ？

空飛ぶコークはどこに？

空飛ぶダイエット・コークはどこへ消えた？

それは、ラクダたちのコブの中に・・・・・・・・

酸欠の鯉

酸欠の鯉

口でマバタキする

みどりいろの池

底の蒼い空

風の止まる時

月の出ない闇

ひげをなくした猫は

堀から落ちて死んだ

酸欠の鯉

ねむれないウロコ

時計台が焼け落ちて

あのこはいなくなった

音のない場所

ふくらんだ水

夜歩く巨人は

砂の中に沈んでいった

思い出は無い

街はいつもおいでおいでをして
そのまま逃げてゆく
それがいつものやり口
それがいつものやり方

こんなにもせまく
きたない空のくせして
いばりくさり
笑っている

答えのもらえなかった問いは
ちぎれ踏みつけられ
きなくさい風に巻き上げられて
そして消える

眠たげな目をしくさって
何もないんだ

日曜の憂鬱にまぎれて
コーラの空き瓶を集めてまわり
密造酒でも作ってやろうか

ひしめき合い
ざわめき合い
でたらめできれいな夢が
このどうしようもない空洞を埋めているんだ

すべての街は廃墟なのだ
すべての都市はガレキなのだ

そんなことにも気づかずに
へんなけむりを吐くので精いっぱい
のやつらは
一体何をしているのやら

そしてまた日が暮れるのか

どこかへ行けるつもりならば
どこへでも行けばいい

きなくさい風に巻き上げられて
消えるだけだよ

おはよう、シラケさん

目覚まし時計はけだるそうにいななく
泣き出しそうなガラス玉 朝の光反射して
こどもたちは遊ぶ なわとびを続ける
砂をこぼしながら きみがささやく

のぞきからくりの中で地球が回ってる
いつからかこのままで絵の具にまみれて

ペンギンたちは移動を開始する
思い思いの歩き方 とびはね方で
泣き出したガラス玉 庭に放り投げ
王様も乞食もみんな大笑い

のぞきからくりの中で ぼくら死んだふり
誰にもきづかれずでたらめな風をおこし

ですぽら

天井裏から飛び出して 愉快的奴らがやって来る
表通りはダダイストとアナーキストが盆踊り

踏みつぶされた空き缶 腐った生卵

でたらめなガラクタ でたらめなロケンロール

これから起きるできごとの全てを覚えておきたい
そして間髪入れずに忘れてしまいたい

夢見るカンガルー

カンガルーは夢を見る

袋の中で夢を見る

カンガルーは夢を見る

我が子を抱いた夢を見る

カンガルーは夢を見る

不思議な予感に満たされて

カンガルーは飛び跳ねる

不思議なリズムに誘われて

カンガルーは飛び跳ねる

袋の外を飛び跳ねる

カンガルーは飛び跳ねる

哀しく楽しい一日の終わり

カンガルーは夢を見る

哀しく楽しい一日の終わり

カンガルーは夢を見る

袋の中で

袋の外で

何事も無かったようにスパ

スパゲッティをぐるぐる巻き取って

スパゲッティをぐるぐる巻き取って

スパゲッティをぐるぐる巻き取って

あなたの背骨と一緒にぐるぐる巻き取って

常夏のクロス・カントリー

灯りが見えたら一目さん
ぼくはぼくを溶かしに行く
塵も積もればガレキの山に
きみの話にや、もう飽きたよ

キラキラ瞬く電飾
うそつきだらけの街並み
へんてこな風景
とどのつまりは堂々廻り
山の向うも海の向うも
どこまでも不毛地帯
きみにはほとほと
うんざりさ

でたらめな言葉
ですべらの日々
できそこないの歌
きみとぐるぐる踊りだす

シャボン玉

シャボン玉

割れて

壊れて

燃えて

砕けて

光の速さで切り裂いて

ぼくも

あの子も吹き飛ばして

空の真ん中を

突き破れ！

ドイツのチキンライス

ドイツのチキンライスを食べる

片田舎の食堂

くぐもった空

わたしは匙をねぶり

耳をすます

単調な電子音

夢見る午後にひとり

ドイツのチキンライスを食べる

キヤベツの酢漬けを添えて

太陽にさらわれて

うそをついて雨が降った

海はあふれ山が揺れた

シャボン玉の中で

あなたはくるくる回っている

雲や風を映しながら

はじけて消えてしまうまで

ぼくの人さし指に突かれて

はじけて消えてしまうまで

太陽は人さらい

あの日のぼくらを隠してしまった

追いかければ遠ざかる

笑いながら逃げてゆく

うそをついて雨が降った

海はあふれ山が揺れた

はじけて消えたあなたを連れて

笑いながら逃げてゆく

わたしの中を

おれの中を流れる河と

おれの中に盛りあがった山と

おれの中に広がる空と

おれの中を吹きぬける風と

おれの中で波打つ海と

おれの中につづく道と

おれの中にかぶ雲と

おれの中を照らす光と

青虫の悲劇

青虫はのたりと進む

キヤベツ畑ですごす午後

サンゼンたる陽の光の下

青虫はのたりと進む

吹きぬけるたおやかな風

やわらかく流れる時間

青虫はのたりと進む

寄生虫のたまごを背負って

凧の歌

時計はとまり
卵は割れる
ラクダに乗って
国を追われる
みんなが歌い
ぼくはだまる
凧が凧いで
今日が終わる

織句

わすれられないあの場所で
たびの支度をととのえる
しんと冷えこむ冬が終われば
はる風が吹いてくるでしょう
ひみつの言葉をささやけば
ともだちみんな来てくれる
さびしい身体を引きずって
らせん階段を降りてくる
いきもつかずに走りゆく
にた顔つきの子どもたち
ここにいつからいるのだろう
ろndon橋で別れてから
さよならの声は聞こえずに
れんが造りの家のそばで
たびだつぼくは雲の上

みみづ

何をまちがえたのか

天気の良い日 アスファルトの上に

ミミズが一匹うなだれていた

まだ子どものように

ハチマキを巻いてはおらず

どっちが頭か分からない

ただ その頭か尻尾か判然としない体の端から

ゆっくりと干からびつつあった

——どんな気分？

尋ねてみたら、

——あんたと同じよ。

父を探して

父さんが居なくなつた

牛小屋の中か

ウサギ小屋の中か

はたまたニワトリ小屋の中か

日がな一日さがしつづける

雲ひとつない空の下

日がな一日さがしつづける

夕ぐれ時の街はずれで

やっとのことで見つかった

土管の中にもぐりこんで

父さんはニコニコ笑っていた

子どもたちの結婚式

子どもたちの結婚式

森の奥ふかく

木もれ陽につつまれて

子どもたちの結婚式

カーテンのドレスをかぶり

つめたい水でケーキをつくる

子どもたちの結婚式

だれもが微笑んでいる

幸福な昼下がり

森の奥ふかく

だれも知らない場所で

子どもたちの結婚式

いつかのぼくらの姿

鯛のおかしら

わたしの口の中

ムキエビみたいな虫が二匹

たくさんの足でしがみつ

ねむったふりして肥えてゆく

いつの間にやら住みついて

まるまる肥って黙ってる

目鼻も口もない体

上あごの裏にはりついて

なにが楽しい？

なにを望むの？

ただその場所にいることか？

目を開けたまま夜をすごす

しづかなわたしの口の中

タイノエ

イキをひそめ

ぼくら二人

うすぐらい場所

身を寄せあつて

どこからか聞こえてくる

心臓の音に耳をすます

しずかな海の中

まんじりともせずにいる

きみは蜜柑を食べながら

きみは蜜柑を食べながら

縁側で眠る子犬たちの数を数える

ぼくはほおづえをついたまま

子犬たちのまねしてまどろむよ

きみは蜜柑の袋を吐き出して

途方に暮れて僕を見る

いくら数えても数え切れない

眠り続ける子犬たちは増え続けている

たいくつすぎるね

もうすこしこのままで

昔路地裏から見上げた空は

蜜柑の色してだまりこんでたよ

ものすごい速さで遠ざかる

パノラマみたいなまぼろしにまみれて

落とし物も見つからずに不満顔のぼくは

たったひとりですつと待っていた

蜜柑色した空がぜんぶを

ぜんぶを 飲み下してしまうのを

たいくつすぎるね

もうすこしこのままで

きみは蜜柑の皮とふくろをまとめて

蜜柑の余韻にひたってるみたい

仔犬たちは素知らぬ顔のまま

しっぽを空気にとかしている

ぼくはまどろみつづける

きみもまどろみはじめる

そのうち一緒に子犬になるかもね

チーズトースト狂の夢

チーズトースト食べて寝た夜は
なぜだか胸騒ぎが止まらない
きみのかたわらで丸くなっても
なぜだか心はちぢに乱れて

チーズトーストが僕の中で夜通し糸を引いてるの
チーズトーストが僕の中で夢見てるのかしら

タマネギ食べて眠った子猫
だれだい、今夜のえさ係は
きみはまぬけさ、どうしようもなく
子猫を抱えておろおろ歩き

ぼろぼろ泣きながら町に飛び出して
高架橋の上で月を眺めて
腫れあがった世界のかげら拾い集めるの？

チーズトースト食べて寝た夜
タマネギを食べて眠った子猫
ぼろぼろ涙をこぼす三日月
まるまるまる肥った下卑た太陽

ぼくはきみのかたわらで
きみは子猫のかたわらで
みんなで夜通し糸を引き
夢見てるのかしら

浅茅露

どこかに降りていた
みかんみたいな月が沈む時に
ありきたりの形をして
ぼくとつとしたしゃべり方で
ラッパに水をそそぎ
そつと耳をすます
あの子の声がきこえてくる
それはちよと絵みたいなものだ

子どもの頃を思い出す
となり街に行った夜のこと
こうこうと灯のともる
大きなスーパーの前を通り過ぎ
国道を走りつづけた

あんなに大きなスーパーは
ぼくの街にはなかったのだ
おかしなくやしさを覚えた
そのくやしさが
ありきたりの形に変わり
ぼくとつとしたしゃべり方で
地球のまわり具合を苛んでいるのだ

どこかに降りていた
みかんみたいな月が沈む時に
みかんみたいな月が沈む場所に

散歩

あふれだすものなど
信ずるに足りない
信ずるに足りない
情熱の帰結

宇宙の色は何色？
クレヨンで描こうと
きみは画用紙を前に
世界の大きさをおそれている

海に出ようよ
海に浮かべようよ
なくしたもののすべてを
ちいさな船に乗せて

重なり合った流木に
火をつけてあたたまろう
つもりつもった年月
両手に抱えて

そんなふりをして
となりにいるきみを無視して
となりにいるきみに無視されて
だれも映っていない写真を眺める

だからこのままずっと
へんなかったこの子猫を引き連れて
この川沿いをどこまでも
歩いて行きたい ただそれだけ

そんなふうにして
歩いて行きたい ただそれだけ

そこに在る

たとえばそれは

もつとあたりまえの形をして

何食わぬ顔のまま

そばにいるのかもしれない

しずかな雨の降る

ねずみいろの放課後に

くもり空はすこしだけ

やさしかったかもしれない

きみが抱えている

その古い本の

ページをめくることに

くずれてしまう

遠い遠い　あまりに遠い

遠すぎて近づいてく

街には夏ミカンのおいがあふれ

足の長い虫達が飛び交っている

約束の場所には

骨のかけらうずめて

こぼれ落ちていくぼくは

すてきな夢をみる

たとえばそれは

もつとあたりまえの形をして

何食わぬ顔のまま

そばにいるのかもしれない

そこにあるのかもしれない

そこにあってほしい

まぶたのある魚

夢の中を泳ぐ魚は

マバタキもするし 目を閉じて眠るし

まんまるの目を閉じて、水の底でものおもい

何を思うの

何を思い出すの

夢の中で 魚はとてもしもいい気分

何をするでもなく

何にもしたがわず

目が覚めたら 魚は涙をこぼすのか

こぼした涙はすぐに溶けて

だれにも知られずに

くずれてしまいたいような切紙細工の街中を

せなか丸めたぼくは通りすぎる

あてもないような不自由な心は

音がとぎれた時 雲の上にある

ありあまる言葉は

どれもこれもぺてんだから

へたくそなやり方で 手探りくりかえす

つめたい湖にしずんでいた時計が

再び動き出す

そうしたら 何か分かるだろうか

夢の中を泳ぐぼくらは

マバタキくりかえし 目を閉じて眠る

うすぐらい水の底

とどかない光

何も思わず

何も思い出さず

目がさめれば ぼくらは涙をこぼすのか
へたくそなやり方で 言葉をさがすのか
あてもなくすごす日々 音がとぎれたら
みなもの上にある あの雲を眺めている
夢も見ないで

水

なつかしいコップに水をそそぐようにして
行きかう人々は むずかしい顔つき

風みたいに ほこりのように 食べものみたいに

何者でもないかのように 電車が走り去る

足をとられないように 大いそぎで

今夜は寒くなるから こんなに夏なのに

こんなに夏なのに

今あるものは わけもなかなしみで

わけもなかなしみは 昨日のからだに残り

それは山になったり 海になったり

頑是ないままで 思いをはせている

いつものやり方で 水をそそぐようにして

なつかしいコップに 水をそそぐようにして

今夜は雨模様

電気

デ・ン・キ

それは

デ・ン・キ

で動くので

ぼくはクラゲを捕って来て

電気を精製しようと思う

カツラの天プラ

ワラジの唐アゲ

宇宙のエネルギーは

右マキ？左マキ？

アトリエ

さつきからずつと

頭が痛いから

植木鉢ごしに空を見れば

だれの顔も見えなかった

どうぶつ園でひとりきり

雨のおいをかいでいる

どうぶつたちは気だるく横たわり

互いの誕生日を祝っていた

たくさんの傘をさして

駅前通りを足早に歩く

きみの姿はマバタキくりかえし

考えるひまも与えない

折れた枝で

アスファルトをなぞり

どこかにたどりつくまで

うたを口ずさむ

口ずさむほどでもない

わらべうた

夏

まつすぐなものも

ねぢれてるのも

よい具合にかたぶいてるのも

どれも、たいくつ

みんな、たいくつ

たいくつの、極み！

その、たいくつの海に溺れて

ぼくはどたばた、立ち泳ぎ

そのさまはまるで、盆おどり

また夏が

夏が来るのだ

手拍子鳴らして

野菜かじって

あたりまえのうそをついて

夏が来るのだ

ぼくも行くのだ

思えば間拔けな足

ハガタをつけて

水に飛び込む

かわず飛び込む 水の音

本を一冊、小脇にかかえて

豆電球をかみくだく

あなたは買い物袋をぼくに押し当て

ニワトリみたいに泣きじゃくる

これもまた恋なのだろうか？

はたまた冗談なのだろうか！

伸びきったエラをひきずり

昆虫の写真を撮って

泥の中で待ち合わせしよう

一からやるのさ

またぞろ、一から

鉄だとか消しゴムだとか水中めがねだとか

そうしたものが ぼくは好きさ

ひとつのこらず捨てたから

頑はないよおれは

とめどなく涎を垂らし

駅前で案山子になっていたら

さげすまれ

あざけられ

けとばされ

そして救われた

土くれが飛び交い

ホーキ星がふりそそぎ

空は割れ

こどもたちは旅立つ

いかりを上げる！

轟き

木を植えて

いちめんに木を植えて

それはそれは

いちめんの緑で

植わった木は

やがて枯れ果て

それはそれは

いちめんの枯野原で

その真ん中を

泣きながら

と同時に

笑いながら駆け抜けてゆく

そんな あなたの姿を

人は「風」と名づけた

恨んだところで仕方無い

したたかに顔面をうちつけて

したたった鼻血の跡

それはけだるい昼下がりに

さんとさんと照りつける太陽の下

何度目なのだろう、こんなことは

おれはもう数え切れぬほど

かくのごとき痛みを味わって来たのだよ

それでも依然として

がらんどうの肋骨を軋ませて

ごうごうと風は吹き抜けてゆくのだ

インチキな念力のように

おれは声を張り上げて

静かな歌をうたう

決意

もつともらしい顔

うろんな顔

きざな顔

さもしい顔

うらさびしい顔

こころもとない顔

みんなみんな屋根の上に並べて

もう二度と帰らない

まやかしの鼓

遠く汽笛の声

海の記憶をはらんで

ぼくのついた嘘が

きみの輪郭を作った

おぼえかけた言葉

馬車に乗ったイキモノ

水の中で咲く花は

だれかの舌の上で受粉する

いつも心は破れて

その傷口からこぼれる

ばらばらの骨のかげら

ひとつひとつに名前をつける

これから毎日が

祝うひとのいない誕生日

くじらの枕に寄りそって

時間をむだにしたい

色彩のない未来が

おせっかいに話しかけてきても

どこかで聞いた文句を繰り返すだけ

ただそれだけの、まやかし

ねむれ化石

ねむれ化石

かぞえ切れぬ思い出を抱いて

月のひかりも届かぬ場所

ありし日の海を心にうかべ

ねむれ化石

夜の冷気もお前には触れない

宇宙がマバタキしている間に

ありし日の海に心をうかべ

ねむれ化石

夢も見ずに

ホーキ星

ホーキ星

となり町に落ちて

数え切れない歳月を燃やす

ホーキ星

私たちの群れ乗せて

うるし色の夜を溶かす

何もこわくない

何もけがさない

丘の上で花束を背負い

あなたの住む家まで

ホーキ星

ちぎれながら飛び去り

ぼくの影をかくしていた

ホーキ星

干しブドウ拾い

涙にぬれた少女に告げる

何もおそれずに

何も思わずに

こわれた汽車のように

あなたの眠る水辺まで

ホーキ星

となり町に落ちて

ホーキ星

うるし色の夜に

ホーキ星

涙にぬれた少女

ホーキ星

それは嘘だった

庭をすりぬけて

丘の向うまで

牛に乗ってゆく

角砂糖をちりばめて

ビニルをはりめぐらせ

もぐらと歩いてゆく

本を一冊

ソースをひと匙

それで許される

それで救われるならば

飲みかけの氷飴も

いらだつほどにたおやかで

絶句

またしても

こころの中で

だれか死んだ

たいせつなものは

いつも

例外なく

踏みにじられる

神経だけは

生きていて

飽きもせず

痛みをつたえる

かくもずさんな

宇宙なり

にげるなよ

時を忘れた象

エンもユカリも無いわけでもなく
エンもユカリも見えないだけで
あの日の言葉がようやと
分かったような気になっている

カタチくずれて風に吹かれて
生きたここちも もう残らない
生きたあかしも もう残さない
海鳴りの音は貝殻の中

十一月の空の下

象はずかに歩いてゆく
こぼれた涙は ひとときらめき
そしてまた夜がおとずれる

詩集『ドイツのチキンライス』の最後を飾る詩

八岐の園をすり抜けて

きみのもとまでひとつ飛び

腕を揺らし

脚を鳴らし

豆を撒いて

豆、大量に撒いて

鯉と接吻

きみと口づけ

ここから始まる

チキンレース

ドイツのチキンレース！